

インテリア化する薪ストーブ

薪ストーブ導入の動きが着実に全国に広がりつつある。長野県伊那市は全国でも最も薪ストーブが普及している市町村の一つといわれるが、伊那市にある薪ストーブを販売する会社D社が10月だったと思うが、展示販売をも兼ねたフェスタを開催したところ4千人もの来場者があったという。しかも地元は一部にとどまり大半は東京をはじめとする全国からとか。沖縄からきた人もいたとのこと、驚くばかり。

東京からの購入者についても、D社はストーブの設置工事を請け負っており、伊那市から工事に出かけることになるだけでなく、使用する薪も配送している。東京等の大都市の購入者の薪の使用量はさほど多くはないとのこと、他の暖房器具と併行しての薪ストーブ利用のようだ。要するに暖房目的という以上に、インテリアの一つとして薪ストーブをとらえていくらしい。どうも薪が燃えて揺ら

めく炎を見て楽しむ、炎に癒され解放感を味わう、あるいは炎を中心にして人が集まる、そんな時代が到来しつつあるようだ。

動き始めた循環

薪も地元だけでなく各地に販売

だけでなく、地域森林の伐採が促進されて、山林の中が明るくなってきたともいう。

これに関連して別途、キノコの専門家である信州大学の山田明義准教授から聞いた話であるが、今、比較的森林の手入れが行われてい

めるのではないかと、という。

さらに伐採がすすむことにより、マツタケだけでなく、ハナイグチ等のキノコ類が増え、黒トリュフまで取れるようになるという。さらにはナンテン、ヤマゲワ、カキドオシ、カツラ等、薬草原料になる低木類も増加することから、これらを6次産業化して医療食連携の検討も始められている。

多様な森林が持つ潜在力

全国的に森林の荒廃が進んでいる中、薪ストーブの普及・増加をテコに地域循環を取り戻しつつある好例である。ストーブ用薪に限らず建材、家具、ペレット等と木材の利用範囲は広い。また明るく整備された森林は、森林浴、グリーンツーリズム等、人を呼び込む潜在力も秘める。森林の荒廃を嘆くよりも、知恵・工夫をこらして自分たちで今できることに取り組んでみよう。突破口が開かれ循環を始めれば恵みは大きい。

時流を読む

薪ストーブからの地域循環

農的デザイン研究所代表 荻谷 栄一

されるが、原木は地元森林組合を通じて調達し、D社がこれを切断し割ったうえで乾燥して薪に仕上げる。薪ストーブの売上と併行して薪の売上も増加し、原木を供給する森林組合も、これが主要事業となつて事業量の増加に直結する

る伊那谷は全国一のマツタケ産地だそう。以前は関西や中国地方が大産地だったが、松くい虫の発生等で生産量が減少し、相対的に伊那谷のシェアが拡大し、推計で国内でのマツタケ販売額100億円のうち、約4割を伊那谷産が占